女神の事情。

RAM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女神の事情。

【Ｎコード】
Ｎ１８６４Ｚ

【作者名】
ＲＡＭ

【あらすじ】
国王の王妃第一候補である公爵令嬢アイリーン。彼女のことを人は“女神”と呼ぶ。曰く、我が侭で、傲慢で、情のない美しいだけの娘。それが彼女のねらいであることも知らずに。　ただ愛する人のため、彼に嫌われても“女神”を演じ、彼を護ろうとする女の子のお話。

プロローグ

ウェルンデズ国の若く美しき王には幼い頃から婚約者が居る。

彼女の名前はアイリーン・フェレン。
波打ち光る金の髪、空よりも澄み切った青い瞳。
白磁のようななめらかな肌に、薔薇のような唇。

ある侍女は言う。
彼女は気に入らない人間がいるとすぐに辞めさせる。
先日も、一人の給仕係が職を追われたのだ、と。

ある料理士は言う。
彼女は自分の思い通りにならないと気に入らない。
この前は杯を王とおそろいで高価なものに変えさせたのだ、と。

ある女官は言う。
彼女は情というものがない。
小さな粗相を犯した侍女見習いが一週間折檻され、げっそりと青白い顔で帰ってきたのだ、と。

城の者達は言う。
彼女が王妃になった暁には、豊かで平和な国ウェルンデズも傾き倒れてしまうだろう、と。

そして彼女をこう呼んだ。
美しさを引き替えに悪魔に心を売り渡した気位ばかりの“女神”と。

彼らは知らない。
その噂の裏にひそむ真実を。

彼らは気づかない。
その噂を流すのは、彼女から遠き者達だけだということを。

彼らは見ない。
その噂を聞いて“女神”が微笑んでいることを。

ほんの少しの人たちだけが知っている。
その微笑みが、世界で最も美しく、優しく、そして寂しげであることを。

貿易商の娘（前書き）

女神。１００お気に入り記念（？
こんな雰囲気で行きます。
一気にどばっとあっぷですいません。

そして、主人公は女神ですが、ちょびっとチーパ目線から入ります。

貿易商の娘

チーパ・ポッティは、目立たないように柱の陰に隠れながら、自分以外は華やかな雰囲気の会場を眺め、小さくため息をついた。

（こんなつもりじゃなかったのに。）

昔から社交界というものに憧れていた。

４歳の頃に母を亡くしてからは貿易商の父と共に船に乗り、世界中を旅した。

その生活は各国に様々な仲間も出来て、とても楽しいものではあったけれど、時々見かける馬車に乗った貴婦人に憧れため息をつく普通の女の子でもあった。

父が辺境の地でたまたま発見した、光の当て方によって七色に変わる宝石。この宝石の専売権を得ることができていなかったら、きっと今も船に乗っていただろう。

虹石と名がついたその宝石で巨万の富を得てこのウェルンデズ国に邸を構えた私たちは、ほどなく社交界への出入りが許されるようになった。

世界中にいる仲間からも祝福され、期待にあふれて精一杯お洒落した私のデビューを迎えたのは、厳しい現実だった。

そこにいる人々はみな美しく、雅で、そして冷たかった。

『ねえあなた、猿語ではなくて人間の言葉で仰ってくださらない？』

『これはバーラの言葉よ、そんなことも知らないの？』

『わたくしはパーレス侯爵のいとこにあたるのよ。それで、あなたは？』

上流階級の言い回しも、偉人の言葉も習ったことなどなく、もちろん有力な貴族とのつながりも無い私を簡単に受け入れてくれるほど、甘くはなかった。

父は有力者とのつながりを作ろうと奔走しているし、親しい友人もいない。私の味方など、誰一人としていなかった。

近寄ってくるのは持参金目当ての没落貴族や、若い娘なら誰でもいいというような色ボケ爺。

昔夢見た白馬の王子様のような人たちは、ひょろりと背だけが高い地味な娘など、目もくれなかった。

所詮、別世界だったのだ。

（こうした席に出席するのは今日で最後にしよう。）

夢を叶えてくれた父には申し訳ないけれど、もともと私が有力な婿をつかまえるなんて期待などしていないだろう。

そう決意したとき、突然会場内のざわめきが止んだ。
何事かと柱の影から出たチーパも、自然と会場の入口に位置する階段の上へと視線が惹きつけられていた。
会場内のありとあらゆる人間の視線を一身に受け、優雅に微笑みながら会場内を見渡しているのは。

「女神だ……。」

誰かが恍惚としてつぶやく声が聞こえた。
（彼女が、“女神”…。）
チーパは彼女の姿に目を奪われていた。

聞いたことがある。
堕ちた女神、アイリーン・フェレン。五大貴族の筆頭、ペリーズ公爵の一人娘。
我が侭で傲慢な、世にも美しい娘。

彼女は、噂以上に美しかった。

階段を一歩一歩下りるたびに、緩やかに結い上げられた淡い金の髪が揺れている。
集まった視線に怯むことなく青い瞳で見返し、楽しんでいるようにさえ見える。
彼女の手は赤茶髪の美しい青年の腕に添えられ、二人の周りはまるで空気までもが違って見えた。

その二人を持ち構えるように、階下には何人もの人間が集まりだ

した。影ではどんな噂をされようとも、彼女は人を惹きつけてやまない家柄と、財産と、美しさをもっている。

（私とは大違い。）

しかも彼女はまさしく白馬の王子様ならぬ王様の正妃第一候補でもあるらしい。噂などの影響か確実といわれた結婚も延び、最近では隣国の王女が本命になっているらしいとも聞くけれど。

（馬鹿な人。）

結婚するまで、我慢でもしてすばらしい王妃候補として演技すればいいのに。正妃になってしまえば簡単には離婚など出来ないのだから。

（私には関係ないけどね。）

あんな恵まれた人も思い通りにならないことがある。少しだけ、いい気味、と思う自分が嫌で、チーパはこっそりと会場を出ようと歩き出した。

貿易商の娘２

人混みを避けつつ歩き、やっと出口の扉が見えてほっと息をついたとき、それは起こった。

一人の貴族風の男がチーパにぶつかり、そのままチーパは斜め前へと突き飛ばされた。

どんっ――――ぱしゃん！

「きゃあっ！」

唖然とするチーパに、悲鳴をあげた少女が勢いよく振り向いた。彼女の目は怒りに燃えていた。

彼女のピンク色のドレスの右袖の下側の一部が真っ赤に染まっている。

どうやらグラスを持っていた彼女の左腕にチーパがぶつかり、中のワインを右腕にぶちまけさせてしまったらしい。自分の顔からさあっと血の気が引いていく。

「も、申し訳ありません。弁償はいたしますから……。」

「それで済むと思ってますの！！？」

少女は目をつり上げてチーパを睨んでいる。

ちらりと周りを見たが、あのぶつかった男の姿は見えなかった。ただし、たくさんの人間がどこか面白そうにチーパ達を見ていた。

他の者は見ないふり、聞かないふりだ。

チーパはこの状況をなんとか打開しようと、必死に頭を巡らせた。

自分の社交界での評判はもはやどうでもいいが、父の仕事に支障を来したくはない。

「申し訳ないのですが、会場の外でお話ししませんか。ここでは他の方の邪魔になるかもしれませんし…。」

「そうやって、うやむやにしようとしているのね！そうは行きませんことよ！この始末、どうしてくれるのです！！」

チーパは焦りながらも心の中で大きく嘆息した。

相手もこう大きな騒ぎを起こすのは都合が悪いだろうに、箱入りのお嬢様はそんなことには頭がまわらないらしい。

相手にしてきた貿易相手とは話が違う。

どうしようかと途方にくれるチーパに、相手の貴族の娘は無視されたと思ったのか更に顔を真っ赤にさせて怒りの表情を浮かべた。

「ただの成り上がりの娘のくせに馬鹿にして……！！」

どんっ、と肩を突き飛ばされる。

その思いがけない強さにチーパはよろめき、今度は後ろにいた人間にぶつかった。

ぐちゃ、という音がして、次いで皿が床に落ちる音が聞こえた。

布越しに背中に何かが付着しているのがわかる。

斜め下を見ると、料理が載っていただろう皿と、ぽとりとおちたマッシュドポテトが見えた。

（あーあ、もったいない。）

どこか他人事のように考えた。

周りの人間がくすくすと笑っている。

あの貴族の娘が意地悪そうな笑みを浮かべながら、少しワインの残ったグラスを回している。

（あんなに華やかに見えたのに。）

おとぎ話の世界は、こんなにも醜かったのか。

その時、凛とした美しい声がその場の空気をひき裂いた。

「私にも、ワインがかかったのですけれど。」

その場にいた全員がチーパの後ろに勢いよく視線を移した。

チーパものろのろと振り向き、その瞬間呆然として目を見開いた。

（な、なんでこの人が……！）

そこにいたのは、皆が唖然として見つめていたのは、あの“女神”。

ペリーズ公爵令嬢だった。

傍らにあの青年を従え、不機嫌そうに腰に手を当てている。
「待っていたのだけれど、あまりにお話が長いから口を挟ませていただいたわ。
ちょっと見てくださる、ここの所。」
そう言って彼女はウエストのあたりを指さした。淡い水色の彼女のドレスには、ほんの小さな赤い染みが滲んでいた。
（いや、それ私じゃないでしょ……！）
心のなかで思わず突っ込みを入れる。
彼女があの場にいたなら、分かっていたはずだ。
そのくらい、彼女には清廉とした圧倒的な存在感がある。

呆気にとられるチーパを代弁するように、右隣に立っている男がおそるおそる口を開いた。
「あの、しかし公爵令嬢。貴女はこの騒ぎが起こったとき会場の奥で屋敷の主人と会話をなさっていませんでしたか。ワインがかかったとは考えにくいのでは…。」
（この男、あの騒ぎの渦中でも女神を見つめていたのね。）
チーパは呆れながらも、心の中で男の言葉に大きく頷いた。
しかし女神は、動ずることなく鷹揚にその男を見やる。
「なあに、私が嘘をついているとでも？」
「い、いえっ、とんでもありませんがっ！」

男は真っ赤になって俯いた。それが公爵令嬢の不興を買ったことに怯えたからなのか、あの美しい目に一瞬でも見つめられたからなのかは定かではないが。

女神はその豊かな胸を張り、ふぅっと息を吐いた。

わかっていないわね、とでも言うように力無く首を振る。

「この騒ぎが聞こえた後にふと見たら、ドレスに赤い染みがついていたのよ。この娘のせいとしか考えられないじゃないの。」

その儚げな美しさに恍惚としている者を除けば、チーパを含めたその他の人々の考えはひとつだった。

（ほ、本気なの……？）

チーパは手のひらに汗が滲んでくるのを感じていた。

女神は悪魔に常識、知性さえも噂以上に引き渡していたのだろうか。

これは、いわゆる『いちゃもん』に過ぎない。貿易相手でこのような人間は何人も見てきた。

けれど、そのときと違って相手は対等ではない。ずっと格上、それも天上の女神と呼ばれる相手だ。

文句を言える相手ではない。

チーパ以外でも、誰もが、口を出せる相手ではなかった。

そう、王族以外では。

「話をしましょう、そこの娘。私についてきなさい。」

女神はそう言いながら不機嫌そうにチーパを見つめ、出口の扉へと歩を進めた。

ひやりと汗が背中を伝う。

（何を私に求めてくるのだろう。）

あのピンクのドレスの娘の方がマシだったのかも知れない。

けれど、ここで逃げては父親の事業は簡単につぶされるだろう。

それだけの権力を持つ相手だ。

重い足をなんとか持ち上げ、俯いたまま彼女の後ろについて歩こうとした途端。

「お待ちなさい！わたくしとのお話は終わってません事よ！」

あのドレスの娘の、金切り声が響いた。

そしてチーパは、この会場のほとんどの者が自分たちに注目しているのに気づいた。

（お父さん、ごめんなさい…。）

ポッティ家が社交界でつながりを築くことは、もう無理かも知れない。

チーパがひきつった顔で振り返ろうとすると、ふわりと薔薇の香りのする人間が隣を通ったのがわかった。
ゆるゆると顔をあげ、それが女神であったことで驚いて口をぽかんと開ける。

女神の結い上げられた金髪は、間近で見ると、さらに美しかった。いや、それはいい。

（なぜ、私の手をにぎっているのだろう。）
チーパの前に立った女神は、目立たないように後ろ手に彼女の手を握っていた。

ぼんやりとするチーパの見えない所で、女神は怪訝そうに眉を寄せ、ピンクのドレスの娘を見やった。

「私にはもうお話しはおわったように思えたけれど？」
「公爵令嬢、その娘はわたくしのドレスをこれほど台無しにしたのですよ！なんの弁償の話もしておりませんわ！」

相変わらず顔を真っ赤にして怒りを表す少女。
女神は心底不思議そうに首を傾げ、床に落ちたままの白い皿を指さした。

「貴女はそれを彼女のドレスにぶつけることでおあいこにしたのでしょう？
なんて素晴らしいと、私感心したのよ。
せっかく仕立てたドレスを汚される痛みを分け合ったのですものね。」

女神は目を細めてふんわりと微笑む。

「そのおかげで、今後誰も相手のドレスを汚そうなんてしないと思うわ。

だって貴女が身をもって、それがどういう結果をもたらすか証明してくださったんだもの。

楽しいはずの夜会がこんな風に白け、ドレスが3着、そしてお料理までもが無駄になってしまうとね。貴女はすばらしいわ。」

誰も何も言えなかった。

無邪気そうに言ったその言葉は、これ以上の夜会の邪魔を、ひいてはチーパへの叱責を許さない響きをもっていた。

悔しそうに娘はくしゃりと顔をしかめ、女神を睨む。

女神はそれを笑って受け流し、チーパの手を握ったまま出口へと向かった。

（この人、本当は、とんでもない策士なのでは…。）

引っ張られるようについていくチーパと女神の後ろから、また金切り声がかかった。

「ならば公爵令嬢、貴女もその娘になにかぶつければいいのでは？」

女神の足が止まった。もちろん手を握られたままのチーパもとまる。

あの貴族の娘はよっぽどチーパを貶めたいか、女神だけなにか弁

償させるだろうことが気に入らないのだろう。

あの少女が貴族であることは胸のブローチで分かったが、爵位は知らない。だが、女神より下であることは明らかだ。

女神の父親は、５大貴族の筆頭なのだから。

こうまで公爵令嬢に、しかもあんなに非道と名高い女神にたてつくなど、何を考えているのだろう。

いや、何も考えていないのか。

女神がどんな言葉を返すのだろうと見つめていると、女神はゆっくりと振り返った。

そして壮絶に美しい笑みを浮かべると、こう吐き捨てた。

「貴女が、先に汚してしまったのでしょう。

その下品な真似事なんて真っ平だわ。」

その微笑みに似合わず冷たい一瞥をくれて、踵を反す女神。二人が出て行くのを、もう止める人間はいなかった。

残ったのは、戸惑い顔の人々と、怒りに体を震わせる一人の少女。

こうして、女神の“女神”伝説は増えていく。

あの少女のような者たちの、悪意のこもった手によって。

貿易商の娘２（後書き）

女神の最後の台詞がキマらない…
変更しました。
難しい～

貿易商の娘３

扉を出て、廊下を通り、人のいない階上へとあがる。
女神は無言だった。
チーパも緊張から声を出せなかった。

（どこに連れて行くのだろう。）

やはり公爵令嬢ともなると、屋敷の主人から部屋を簡単に借りられているのかも知れない。
そこで、謝罪や弁償金、父親の事業の優先権などの交渉を行うのだろう。

先ほどのやりとりは、女神が天然なのか計算なのかよく分からなかった。けれど、この人は噂のような“女神”だけの人ではない。
それは商売上多くの人間を見てきたチーパの勘だった。

人気のない廊下の、最も奥まった場所にある一際豪華な扉を開けた女神について入る。そこでチーパの目に飛び込んできたのは、女神のパートナーの青年がソファに寝そべっている姿だった。

（そういえば、この人いつの間にかいなかった…。）

そのあまりにリラックスした姿に唖然としているチーパの手を離した女神は、近くの机の上にあった書類の束を丸め、赤茶の青年の頭をすぱーんと叩いた。それも、かなりいい音で。

「いってぇ！いきなり何するんだよ、アイリーン！！」

慌てて起きあがり、頭を両手で庇って女神を見上げる青年。

女神は腰に片手をあてて、まるめた書類の束を青年の美しい顔の前につきだした。

「あんたねっ、勝手に逃げるんじゃないわよ！パートナーっていうのは、助け合うものでしょうが！」

「俺があの会場でアイリーンに助けてもらうことなんてねぇだろ！ってことは、俺も助ける義務はない！女の戦いは男は手出しできないって昔から決まってるんだよ、そんなこともしらねぇの。」

「それはあんたのお父様が嫁姑争いに手をだしたくないから作った言い訳でしょ！あんな染みでこの子連れ出してくるの大変だったんだからね！」

ぎゃあぎゃあ言い合う女神と青年。

チーパは愕然とした。

（なに、なんなの。これ、夢なの……？）

背中に残る不快感も、あの感じた屈辱も、すべて夢の中のものなのだろうか。

（だって、そうとしか、考えられない…！）

あの女神が、怒りながら、でも楽しそうに、大口を開けて喚いてるなんて、誰が現実だと思うだろう。

「ごめんなさいね、説明もろくにせずうるさくて。」

そっと背中に当てられたタオルにびくりとして振り返ると、これまた綺麗な女性が微笑んで立っていた。侍女服を着ているが、赤茶色の髪とその顔立ちは、あの青年によく似ていた。

「もうすぐ終わるからちょっと待ってくださいね。」

首をかしげ、水の入ったコップを差し出す。そのときになってチーパは、自分の口の中がからからになっていたことに気づいた。

「あ、ありがとうございます。」

「いいえ。」

にこにこと微笑む彼女からコップを受け取り、全て飲み干す。そっと息をこぼし、やっと全身に感覚が戻ってきたような気がした。

「あ、そうだ。」

空になったコップを返す頃になって、女神がくるりと振り返ってチーパを見た。

どくん、と心臓が跳ねる。

「私フェンの相手なんてしてあげてる暇なかったのよ。」

女神はそう言うと、なにかを見透かすように目を細める。
一気にあの存在感が戻ってきて、思わず緊張に手が震えた。

（言い合っていたさっきとは、別人だ。）

そこにいるのは、誰もが傅かずにはいられない存在。だが、次の女神の言葉を聞いた途端、チーパは頭を鈍器で叩かれたかのような衝撃を受ける。

「チーパ・ポッティ。
貿易商、ダーダン・ポッティの一人娘ね。
間違いない？」

驚きに大きく目を見開いたチーパとは対照的に、女神の澄んだ蒼い瞳からはなんの感情もうかがえない。ぞくりと全身に鳥肌がたった。

（どうして私の名前を。）

会場には１００人以上の人間がいた。まして、チーパは挨拶すらしていない。

「……はい。間違いありません。」

なんとか声を絞り出す。女神の目を見ていられなくて、赤い絨毯の敷かれた床に視線をおとした。

チーパを連れ出すという彼女の言葉。
大勢いる成り上がりの娘の一人にすぎない自分の素性を、最初から知っていたかのような物言い。

それが示す意味とは。

最初から、仕組まれていたのだ。
なにもかも。

ぎりっと音がするほど奥歯を噛み締める。

ここまで見れば、女神が『馬鹿』なわけでは無いことは明らかだ。
目的など知らない。わかっているのは。

すべてが、この女神の手の上。
あの屈辱も、絶望も、何もかも。

怯えの震えから、怒りの震えへと変化していく。

チーパのその様子を黙って見ていた女神は、突然大きくため息をついた。疲れたように力なく傍らの椅子に倒れこむ。

「言っておくけど、あのワインの騒ぎには関係してないからね。あなたを連れ出すのに利用したのは確かだけど。」

その言葉に弾かれるように彼女を見ると、女神は痛むようにこめかみをさすっていた。
女神の隣には赤茶髪の青年がいて、女神を護るように寄り添い、無表情でチーパを見ている。

その目が自分を非難しているように見えて。
かっと頭に血が上る。

（なんなのよ、なんなのよ、そう思って当然じゃない…！）

（どうしてあの女神を見る目を、私に向けてくれないの。）

（私はずっと苦労してきたのに…！）

「じゃあ何、私に何の用なの。」

自然と声が強ばり、自分の耳にも刺々しく聞こえた。
女神が眉を寄せ、目を細めてやれやれとでも言うように首をふった。

「呆れた。分かってる？
私があの時口を挟まなかったら貴女、完全に道化よ。
父親の仕事の評判も落ち、弁償だってあの傲慢な伯爵令嬢はとんでもない額を要求してきただろうし、二度と貴女は社交界に足の先だって踏み入れることは叶わなくなって」
「分かってるわ！」

チーパは女神の言葉を遮って思わず叫んだ。抑えていた感情があふれ、みるみるうちに視界が歪む。

そんなこと、分かっていた。

父親に申し訳ないという思いと、悔しさと、それでも抑えきれない憧憬の気持ち。

「昔から綺麗なドレスを着た人に憧れてた！
私が港で商人と値段交渉をしている隣を、日傘を差して馬車で通り過ぎる貴族達！
必死で頑張って、やっと、やっと、やっと同じ位置に立てたと思ったのに…！」

やめなければと思うのに、口が止まらない。ぼろぼろと頬を涙が伝った。

「デビューしても、誰も、私に見向きもしない！話しかければ、無視、か、皮肉しか言われない！
猿語、無知、縁故…！
あ、あんたみたいにね、あんたみたいに、綺麗で、お金も、なにも、かも全部もって、それを、当然、だと思って、いる、人にはわからない…！私の気持ちは、わか、らない…！」

女神もすべて失えばいい。
あのむなしさ、寂しさを知ればいい。

チーパがひどくしゃっくりをあげながら顔を覆い、崩れ落ちるのを、女神達は静かに見つめていた。
侍女服を着た娘がハンカチを取り出し、チーパに手渡す。

しばらく経って落ち着き、我に返ったチーパはぼんやりとポッティ家の終焉を悟った。

（天下の公爵令嬢にこの暴言…。しかも、助けてくれたのかもしれない相手に…。）

ただの八つ当たりだ。

それでも、最後にすっきりした。

誰もが目を奪われる彼女に、こうまで言ったのはチーパだけだろう。

（もともと、貴族社会なんて向いてなかったのよ。感情的すぎるのは自覚しているもの。）

全てを失う覚悟をして立ち上がり、真っ赤になった目で女神を見たチーパ。

その彼女に、女神はぽつりと呟いた。

「そのドレスがいけないのよ。」

女神も立ち上がり、チーパの前に立つ。
その時になってチーパは、女神が自分より頭半分も身長が低いことに気がついた。
自分より背の高い女性のほうが少ないのだが、チーパはそのことにひどく驚いた。

「貴女の黒茶色の髪と目にその緑は合わないのよ。あと、型は流行から3シーズン遅れてる。
日焼けを気にしてるのかもしれないけど、白粉が白すぎ。肌に合ってない。
なによりも眉のお手入れだって適当なんだもの。
それじゃあ、誰だって田舎者が背伸びした、って馬鹿にするわ。」

思ってもみなかった言葉にぽかんと口を開けて見下ろすチーパの額を、女神は軽く人差し指で押しやった。

「私は美しいって言われるために、ずっと努力してきたの。
何もしなくて綺麗な人なんてほんの一部だわ。それも維持は難しい。
貴女が何を言われたのかは知らないけれど、みんな上辺を必死に繕っているだけ。
ほんのすこし、ごまかすのが上手いだけよ。」

女神は自分の指についた真っ白な白粉をチーパに見せ、安心させるようににっこりと微笑んだ。

「お化粧と同じ。簡単に塗れるし、簡単に剥げる。
私が教えてあげるわ。貴女を立派な貴婦人にしてみせる。」

久しぶりにかけられた優しい言葉。
チーパは瞬きを二回して、女神をまじまじと見つめ直した。
女神は、消えなかった。

（夢ではないの……？）

直々に女神が、レッスン？
ごくりと口にたまったつばを飲み込む。

（この方は……）

もしかしたら。

「私は代わりに何をすれば…？」

ドレスはただの口実だと認めてくれたが、チーパの暴言に対する贖罪もしていない。
助けてくれたお礼もしていない。しかも、女神は力になってくれるとさえ言っている。

その代償は、どんなもので賄えるというのだろう。

女神はチーパの言葉に一瞬動きを止め、小さく息を吐いた。
青年と侍女服の娘は、辛そうに顔をしかめただ女神だけを見つめている。

女神はチーパの目を、まっすぐに見すえた。

「何でもする？」

「私に出来ることなら。」

「聞いて後戻りは出来ないのよ？」

「覚悟の上です。」

もとより女神は、全てチーパから問答無用で奪える立場だ。

この国は、ピラミッドの下が上にたてつくことを許さない。

いや、そうじゃない。

貴族の頂点にたちながら躊躇なくチーパの手を握ってくれた彼女。

八つ当たりを静かに受け止めてくれた彼女。優しい言葉をかけてくれた彼女。

あれが”女神”の真実ならば。

助けになりたい。

そのとき、女神が微笑んだ。

その笑顔はとても美しくて、優しくて、悲しげで。

チーパは顔に血が急に集まるのを感じていたが、次の言葉を聞いた途端、全ての熱は霧散した。

「手を貸して欲しいの。

一刻も早く、私がすべてを失うために。」

貿易商の娘３（後書き）

女神は、こんな雰囲気です。
そしてチーパ編あと一話続くんです。

1：女神の覚悟。

「分かっているのか。
このままでは王妃候補から外されてしまうぞ。」

（しつこいわね。分かっているのかしら、王妃候補は私であって貴方ではないということを。）
公爵が6段レースのドレス姿で王と踊っている姿を思い浮かべながら、アイリーンはそつなく笑顔を浮かべておいた。

「それならそれでかまいませんわ。何故私が他人の評価を気にして行動しなければならないのです？」
ばかばかしいとばかりに肩をすくめてみせる。
そんな娘を、父であるペリーズ公爵は机についた肘に顔を乗せたまま静かに見つめた。

「本気か、アイリーン・フェレン。」
脅しをかけるような声色でアイリーンを貫く鋭い視線を、彼女もまっすぐ見返した。

「あら、もちろんですわ。」

（貴方の思い通りにはならない、絶対に。）

不機嫌そうな、ならよい下がれという言葉にアイリーンはドレスを少し持ち上げて礼をし、くるりと踵を返した。
この重苦しい書斎からでるための扉に手をかけた時、わざとらし

く呼び掛ける声がかかり内心大きくため息をつきながら振り返る。
「なにか？」
「メリンの命日に贈った菓子は食べたか？隣国から取り寄せたのだが、お前が好きなクリームが入っていただろう。」
アイリーンは思わず眉を寄せ唇を噛んだ。
だがすぐに立ち直って頭を巡らせる。
いつもの感情が全く読めない笑顔で彼女を見つめる公爵。その胡散臭さに、背後から妖気のようなものさえ見える。
（わからない、どんな答えを求めているというの。）
アイリーンは焦りでじりじりとした心の内をなんとか宥め、“女神の微笑み”と称される笑顔を顔に貼り付けた。
「ええ、とても驚きました。」
一秒でも早くこの部屋から出たくて、では失礼しますと返事を待たずに書斎から出た。
部屋の外に立っていた侍女のエリルと騎士のフェンに目配せし、後ろにつくのを確認してから廊下を歩く。
アイリーン達が真っ赤な絨毯の敷かれた屋敷の中央に位置する階段を下りていると、その下に銀縁眼鏡で黒服の男が立っていた。
屋敷の使用人頭であるトーマスだ。
「お嬢様、もうお帰りですか。」
「ええ、お話しは終わったもの。」

アイリーンは階段を下りきると、トーマスにまっすぐ向き合ってその黒い瞳を見つめた。
そしてふっと表情を崩して彼の手から自分のマントとボンネットを受け取る。

「またね、トーマス。」
彼が深々と頭を下げるのを尻目に、開け放たれた扉が待つ玄関へと向かった。途中で立ち止まり脇へと目を向ける。

「ペム、ポム、ありがとう。」
アイリーンがふふ、と微笑みながら上機嫌に玄関をくぐるのを見て、扉を抑えていた執事達は耳を真っ赤にしながら頭を下げた。

彼女たちは門の外に停まった馬車へと乗り込むと、王宮へと続く道をゆったりとした速度で戻っていった。

＊＊＊＊＊

「なんなのよ、あの男！」
アイリーンは先ほどの上品さをかなぐり捨て、ついでに邪魔くさいボンネットも頭からむしり取った。屋敷を出てすぐは人の目があ

り被っていたが、もう山道に入ったので人通りは殆どないから問題ない。
こうなるとエリルもフェンも見ないふり聞かないふりで、あさっての方向を向く。
御者のトムも彼女の心内を知る一人だ。しかも彼は人が通れば下手な歌を歌って教えてくれる。
つまり、この馬車の中でアイリーンの悪態はつきたい放題だった。

鈴の転がるような美しい声で精一杯粗野に聞こえるように吐き出す。
実はアイリーンはその意味をよく分かっていなかったのだが、こういうのは気分なので関係なかった。とにかく思いつく限りの言い回しであの男を貶めたかったのだ。

貴族の筆頭たる公爵の一人娘がこうまで下町の悪態を知っている理由を知り、しかも容認している状態の彼女以外の3人は、なんとなく罪の意識を感じながらも遠い目で聞き流していた。

「でも、何か収穫があったのではないのですか？トーマスをじっと見ていらしたから、何かあの方が関係しているのを聞きだしたのかと思っていましたわ。」

一通り言ってある程度落ち着いたアイリーンに、エリルはひざ掛けを渡しながら聞いた。

「ああ、あれははったりよ。もしトーマスが関係してるなら焦って今後何かしっぽを出さないかなぁ、と思ったの。」

まあ、と頬に手を当てたエリルに弱々しく微笑み、アイリーンは背もたれに体をあずけ、目を閉じた。

（今日の敵は手強かった。）
公爵に睨まれたとき怯まずに立っていられた自分に拍手してあげたかった。
情けない。勝てるとは思えないが、絶対に負けるわけにはいかないのに。

「じゃあ、何の話だったんだ？」
向かいの席に座るフェンが口を開いた。その訝しげな顔に片目をちらりとむけ、もう1度目をつむる。
（あまり口にしたくはないけど、仕方ない。）

「基本はいつもと同じよ。王妃になる気がないのか、とかいうお叱り。
ただ、最後の一撃でちょっとよろけちゃったの。」
あれは失敗だった。思わず動揺を顔に出してしまった。
はあ、と大きく嘆息し、きちんと座席に座り直してから二人に顔を向けた。

「あの男ね、『メリンの命日に贈った菓子は食べたか？』って私に聞いたのよ。」
「え、でも、あの菓子が届いたのって…。」

アイリーンは母様の笑顔を思い浮かべて一瞬瞳を揺らしたが、すぐに立ち直って微かに頷いた。

「そう。母様の命日の2日後よ。」

二人は目を見開いてアイリーンを見た。こういう表情はさすが姉弟、そっくりだ。

アイリーンの両親の仲の良さは貴族社会はおろか平民の間でも有名だったのだから、驚くのは当然だ。
母様が亡くなったあとも彼は再婚はしないと公で宣言し、その姿勢は大衆の支持を得ていた。かくいうアイリーンも、公爵の母への愛情だけは絶対だと信じていた。

「公爵が贈り物が届くタイムロスを考えなかったとは思えないし、公爵の贈り物を遅延させる不届き者がいるとは思えない。
ということは、私を揺さぶるための罠か、単純に日にちを間違えていたかのどちらかね。」

どちらにしても、最低な男だ。
母様の命日を利用したにしろ、忘れたにしろ、信じられない。

アイリーンは気遣わしげな視線に軽く肩をすくめて応えた。
傷ついたわけではない。もうあの男に期待などしてはいけない、そう再確認しただけのこと。

「まあ本題は、今夜の舞踏会への招待状に私の名前は無いと報せることね。
いつものことなのだから、わざわざ家に呼び寄せたりしないで欲しいわ。」

かたかたと揺れる景色を見ながらため息をつく。馬車が嫌いなわけではないが、王宮から実家までは片道1時間もかかるのだ。会いたくもない人のためにそんな時間を費やしたくはなかった。
エリルもそうですねぇ、と吐息を吐き出した。フェンは面白くなさそうにふんと鼻をならす。

「しっかし、陛下もよくやるよな。
王宮に住まわせてる公爵令嬢に、自分主催の舞踏会への招待状を毎回忘れるんだから。」

「…喜ぶべきでしょう。全てが順調にいってる証拠。
もともと、公爵が無理矢理私を王宮にねじ込んだだけだしね。」

公爵がアイリーンに家を出て王宮に暮らすよう命じてからもう長い時が経った。王妃第一候補であることと、公爵の祖父が前国王の祖父の弟の息子であるという縁を持ち出して現国王に無理矢理許可を取り付けたらしい。
他の貴族へのけん制だと公爵は笑っていたが、アイリーンはその真意を知っている。

アイリーンは首を振り、ぎゅっと拳を握りしめた。白いほっそりとした手が微かに震えている。フェンはそのアイリーンの様子に眉を寄せて視線をそらし、エリルは静かに自分の手を彼女のその拳の上に重ねた。
アイリーンは少し微笑み、だいじょうぶだからと手を振った。

「全て私が望んだことよ。それより、おじ様から今朝届いていたのでしょう？」
「ああ、俺が持ってる。」

フェンはごそごそと上着の下を探り、一通の封を取り出した。
それを受け取り中を開けると、金枠の装飾が施された上質な一枚の紙が出てくる。裏返すと、前国王の証である紋章が印されていた。
安心してほっと息を吐く。

「よかった、間に合って。さすがおじ様。」
「国王主催の舞踏会の招待状を手に入れるとは、本当どうなってんだろうな。」

心底不思議そうなフェンに同意しながら、心の中で前国王に深く頭を下げお礼を告げた。

息子である国王が舞踏会にアイリーンを招待しなくなってからもう久しい。それが示唆する意味を理解しながら、前国王はアイリーンに招待状を贈ってくれる。
前王妃と二人で余生を過ごすため譲位し、どこか遠くで暮らしているはずなのに、毎回。

（いつもより少し遅れたけど、今回も届けてくれた。）

じっと招待状を見つめ、アイリーンはその紋章を少し親指でこすって微笑んだ。
どうしてもこの心遣いが嬉しい。たとえ後少しで全てが終わると言っても。
それに、今回は特別だった。

「本当に良かった。届かなかったらなんとか潜り込もうと考えていたもの。」
「ええ、確認も取れました。今夜何か起こることは間違いないようですわ。」

エリルはエプロンの裏から一枚の紙を取り出した。黙って頷く彼女に促されそれを開くと、想定通りの情報が書かれていた。

「そう、みたいね。」
ぐっと喉の奥からせり上がってくる何かを抑え、フェンにその紙を手渡す。後で燃やして処分しなければ。

（とうとう、始まるのね。）

「今夜はトーメとロッティも参加できるそうですわ。
……無理はしないでくださいね、アイリーン。」

珍しく不安げな声。アイリーンはエリルににっこりと微笑んで彼女の手を握りしめた。

「大丈夫よ。今回もパートナーはフェンで良いっておじ様わざわざ書いて下さっているし。」

国王主催の舞踏会に婚約者でも家族でもないフェンを連れて行くのは、それこそ鶴の一声が必要なのだ。この特例は、すでに貴族社会で浸透している。

「ん、アイリーンに手に負えなそうな事は俺が助けるから。頼りにしてろ。」

フェンは白い歯を見せてにっと笑った。その幼い笑顔にやれやれと首を振り、エリルは弟とそっくりな自分の赤茶色の髪を一房持ち上げ呟いた。

「いっそ、この髪を切って入れ替わろうかしら…。」

その言葉が本人にも思いがけないほど本気の響きを含み、３人は

顔を見合わせた。

舞踏会の始まりの鐘が鳴るまで、あと5時間を切っていた――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1864z/

女神の事情。

2011年12月17日21時53分発行